様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４３２００７７

研究課題名（和文）アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究

研究課題名（英文）A Complehensive Study of African Tone/Accent languages

研究代表者
梶　茂樹（Kaji, Shigeki）

京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・名誉教授

研究者番号：１０１３４７５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,900,000円

研究成果の概要（和文）：　声調声調というと、東アジア大陸部のいわゆる単音節語をイメージすることが多い。しかしながら、これらをもって声調言語一般を語るわけにはいかない。アフリカにおいては多様な声調言語の類型が現れる。例えばコンゴのテンボ語のように、単語を構成する音節（あるいはモーラ）数に従って声調のパターンが等比級数的に増える言語もあれば、タンザニアのハヤ語のように互換の音節数に従って等差級数的に増える言語もある。さらにウガンダのニョロ語のように単語の音節数に関係なくパターン数２を保持する言語もある。さらにアフリカの声調・アクセント言語において重要なことは、声調の語彙的機能にも増して文法的機能が卓越していることである。

研究成果の概要（英文）：In discussion of tone languages, we usually think of East-Asian monosyllabic tone langugaes such as Mandarin Chinese. However, they are of one type and cannot be taken as typical examples. In fact there are a number of other type tone language in Africa. Thus, for example, we find languages like Tembo of Eastern Congo, in which the number of tonal patterns increases in geometric progression of the syllables (or moras) which constitute the word. In other languages like Haya of Tanzania the patterns increase arithmetically. Still in others like Nyoro of Uganda the number of patterns remains the same regardless of the number of syllables of the words. Another important observation in African languages is that tone functions more grammatically than lexically.

研究分野：言語学

キーワード：アフリカ　声調　アクセント

１．研究開始当初の背景

世界には声調言語が以外に多い。とりわけアフリカには多く話されている。しかし、その実態は十分知られているとは言い難い。通常、声調言語という場合、中国語やベトナム語､タイ語などの東アジアの大陸部の言語をイメージすることが多い。しかしながら、これらの言語とアフリカの声調言語とでは、幾つかの大きな違いがある。

まず第一に、東アジアでは単音節語の言語が多いのに対して、アフリカでは多音節語の言語が多い。第二に、東アジアでは高声調(high tone)や低声調(low tone)などの平板調のみならず、下降調(falling tone)や上昇調(rising tone)も声調の基本的単位(toneme)として存在するが、アフリカでは下降調や上昇調は生じても、それらは高声調や低声調の音声的変異か、あるいは高声調と低声調の組み合わせとして分析できるのが普通である。第三に、アフリカでは、アジアでは稀なダウンステップ(downstep)や浮き声調(floating tone)がしばしば生じる。第四に、アジア諸語では、声調はベトナム語やビルマ語に見られるように、しばしば母音の質（緊喉母音など）の問題と係わるが、一般にアフリカ諸語ではそういうことは見られない。第五に、アジア諸語では、声調の機能として単語を区別する語彙的機能が際立っているが、アフリカでは語彙的機能は一般に低い。しかしながら、アフリカの言語では、声調の文法的機能が高い。この声調の文法的機能は、アジア諸語にはほとんど見られない。第六に、アジア諸語では、声調発生(tonogenesis)に関して音節末の子音の脱落、そしてレジスターに関しては音節初頭における子音の有声・無声の区別の消失など、その音声的要因の多くがわかっているが、奇妙なことにアフリカ諸語の声調の発生に関してはほとんど何もわかっていない。

２．研究の目的

本研究は、以上掲げたこと、またそれ以外のことに留意しつつ、とりわけアフリカ諸語の声調言語としての類型をまず明らかにすることを目指す。そして、個々の言語における声調の文法的機能を明らかにし、ひいてはアフリカ諸語における声調の十全な理解を提供することを目的とする。

３．研究の方法

本研究ではアフリカの声調言語の分析を徹底して行う。研究代表者、研究分担者とも長年アフリカで現地調査を行っており、調査言語についてかなりのデータを持っている。本研究ではこれを声調という観点から総合すると同時に、不十分な点については現地調査により補う。また日本国内では、今まで不十分にしか行われてこなかった音声分析ソフトによる解析を、場合によっては専門家の協力を得て行う。

現地調査については、研究代表者の梶は主としてウガンダ諸語、研究分担者の米田はナミビアの言語、古閑はガーナの言語、そして品川はタンザニアの言語を対象とする。調査の具体的手順については通常の言語調査と変わりはない。

４．研究成果

(1) 研究代表者の梶は、ウガンダ西部のバンツー系諸語、とりわけトーロ語とニョロ語の調査・分析に集中した。そしてトーロ語に引き続き、ニョロ語語彙集を出版した。トーロ語は､声調のパターンが１つしかない(ekitábu「本」)、いわゆる１型タイプである。しかしながら声調が文法的機能を持ちうることを明らかにした。すなわち、トーロ語の声調はドメイン内に１つの高声調 H しか持ちえないため、ドメインの範囲を設定することにより、同じセグメントでも、例えば、１ドメインである名詞句(ekitabu kyánge「私の本」）と２ドメインである文(ekitábu kyánge「本は私のである」）を声調のみで区別するのである。

トーロ語の北に話されるニョロ語は、パタ

ーンが２つある、いわゆる２型タイプであることを明らかにした。すなわち、基底において単語の次末音節にＨのあるパターン（Ａパターン）と音節末にＨのあるパターン（Ｂパターン）である。そして２型のニョロ語から１型のトーロ語がどのようなプロセスを経て形成されたかをニョロ語の綿密な音声学的記述により明らかにした。すなわち、Ａパターンにおいては基底のＨは単独形ではＦとなって現れるのであるが、このＦがＨになる傾向がある。そしてＢパターンでは基底のＨは単独形では１つ前の音節で実現され、かつそれ自身は音節末でＦとなって現れるのであるが、この音節末のＦは弱くなり、しばしば聞こえなくなる。これが極限まで進んだのがトーロ語である。

(2) 研究分担者の米田は、ヘレロ語とスワヒリ語のプロソディについて研究した。ヘレロ語の研究では、語やフレーズだけでなく、節や文のレベルでプロソディを観察することで明らかになった。ヘレロ語では、多くのバントゥ諸語と同様にテンス・アスペクト・ムード（以下 TAM）によって動詞が異なる声調で現れるが、それだけでなく、動詞に後続する名詞の声調の実現形も TAM によって決定されることが明らかになった。またヘレロ語には「特定の接辞からＨが 3 つ以上並ぶと 2 つめ以降のＨにはダウンステップが起きる」という規則があるが、従属節の動詞にこの規則が適用されるか否かを決定するのは、主節の動詞の TAM であることも明らかになった。これらはいずれも語レベルのプロソディの観察からは見えてこない現象である。

スワヒリ語については「アクセントの実現単位」について調べた。スワヒリ語は、バンツー諸語としてはめずらしく声調に対立がない。そのためバンツー諸語の中で最も研究が進んでいる言語であるにも拘らず、アクセントについてはほとんど関心が払われることがなく、その詳細がわかっていない。どの文法書や教科書にも、アクセントの位置が基本に後ろから 2 音節目であること、および若干の例外があることは書かれているが、どのような単位の「後ろから 2 音節目」にアクセントが現れるのかに関しては曖昧な説明にとどまっていた。本研究では、主名詞の音節数や名詞修飾語の種類によってアクセント単位が異なっていることを明らかにした。これらの成果は日本言語学会や日本アフリカ学会をはじめ、いくつかの学会・研究会等で発表した。

(3) 研究分担者の品川は、タンザニアのキリマンジャロ・バンツー（チャガ）諸語における声調に関する問題を扱った。とりわけ、（典型的には）動詞否定形において現れる声調パターン（以下 NTP と言及）について、先行研究による言及を整理しつつ、ルゥ語、ウル語、ロンボ語等の一次資料を用いて検討した。チャガ諸語一般において、いわゆる定動詞を用いた直説法肯定形（あるいは「デフォルト」の文形式）において、しばしば assertion marker と呼ばれる形式（proclitic ないし prefix）が認められることはよく知られている。このマーカーはセグメンタルには *ni=*（ないしそれに準ずる形式）で現れるが、形式固有の高声調 H を有している。つまり、「デフォルト」の形式では常にこの H が生じることになり、これによって動詞構造ひいては文全体の声調パターンが規定される。一方で、例えば否定形など *ni=* が要求されない形式では、それとは異なる声調パターン、すなわち NTP が現れることになる。今回の通チャガ的な検討によって、仮説的推定も含め次のようなことが明らかになった。1) 一部の言語では *ni=* の機能が H のみによって標示され、*ni=* 自体は脱落している。2) NTP は、動詞否定形のみならず、言語によっては関係節や条件説（例えばロンボ語）において確認できる。3) これらは、いずれも *ni=* の機能領域から統一的に説明することができる。すなわち、表面的には同

一の声調パターンが否定と名詞修飾（関係節）と条件説という別々の統語機能を表示しているように見えるが、これらはいずれも assertion marker *ni*= の機能領域外の概念であり、一種の形式の欠如による機能標示と見ることができる。ただし、（*ni*=の機能と相補的に規定しうる）NTP の分布領域は言語ごとに異なり、さらなるデータの収集および分析が必要である。

(4) 研究分担者の古閑は、ガーナおよびコート・ジボワールの大西洋岸に話されるンゼマ語（ニジェール・コンゴ語族クワ語派）の名詞の声調について調査・分析を行った。その結果、ンゼマ語の名詞は、音韻形態的特徴により、２つのクラスに分類される。両クラスを区別する重要な特徴が声調の違いであり、一方のクラス（不変化名詞）は、所有構造において名詞の第一音節が前部要素末と逆の声調になるが、もう一方のクラス（変化名詞）は、所有構造において、前部要素が所有接語のとき、語根頭が H でそれ以降は L に、前部要素が固有名詞のとき、接頭辞が前部要素末と逆の声調になり、語根全体が L になることを明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 15 件）

① Kaji, Shigeki 2013 "Multi-language Use and Lingua Franca Use: Two Strategies for Coping with Multilingualism in Africa", *African Study Monographs* 34(3), pp.175-183. 査読あり.

② Kaji, Shigeki 2013 "Monolingualism via Multilingualism: A Case Study of Language Use in the West Ugandan Town of Hoima", *African Study Monographs* 34(1), pp.1-25. 査読あり.

③ 梶 茂樹 2013「ニョロ語の婉曲・比喩表現」,『アジア・アフリカの言語と言語学』8, pp.201-235. 査読あり.

④ 梶 茂樹 2012「アフリカ人のコミュニケーション―音・人・ビジュアル―」,『言語研究』142, pp.1-28. 査読あり.

⑤ Yoneda, Nobuko 2016 “Event integration patterns in Herero: The case of motion event components”, *Asia and Africa Languages and Linguistics* 10, pp. 219-244. 査読あり.

⑥ 米田信子 2016「スワヒリ語における『～ハ～ガ』構文および類似した構文について」,『スワヒリ＆アフリカ研究』27, pp.17-36. 査読あり.

⑦ 米田信子 2015「スワヒリ語の場所格の主題化」,『日本語学』34(12), pp. 68-76. 査読あり.

⑧ 米田信子・小林晋・牧野友香・小野田風子・中垣友江 2015「スワヒリ語の基礎語彙集試案」,『スワヒリ&アフリカ研究』26, pp.119-137. 査読あり.

⑨ 米田信子 2014「バントゥ諸語における自他動詞の派生関係－スワヒリ語・マテンゴ語・ヘレロ語の場合－」,『スワヒリ＆アフリカ研究』25, pp.54-65. 査読あり.

⑩ 米田信子 2012「アフリカにおける識字を考える」,『ことばと社会』14, pp.43-66. 査読あり.

⑪ Yoneda, Nobuko 2012 “Five Level in Herero (Bantu, R31)”, Tsunoda Tasaku (ed.) *Five Levels in Clause Linkage.* volume 2.（国立国語研究所共同プロジェクト報告書）国立国語研究所. pp.1169-1216. 査読あり.

⑫ 米田信子 2012「スワヒリ語における 2 種類の関係節」, *CLAVEL* 2, pp.13-26. 査読あり.

⑬ Shinagawa, Daisuke 2015 “Vowel length and TMA micro-variation in Kilimanjaro Bantu”, *Asian and African Languages and Linguistics* 9, pp.5-21, 査読あり.

⑭ 品川大輔 2013「アフリカの言語動態および都市言語に関する研究の動向―日本のアフリカニストの業績を中心に―」,『香

川大学経済論叢』86(2), pp.307-318. 読なし.

⑮ Koga, Kyoko 2016 “Event integration in Akan”,『アジア・アフリカの言語と言語学』10, pp. 179-195. 査読あり.

〔学会発表〕（計 12 件）

① 梶 茂樹「Tembo 語，Haya 語，Ankole 語，Tooro 語，Nyoro 語など，幾つかの Bantu 系諸語の声調の類型」. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 2016 年 4 月 16 日.

② Yoneda, Nobuko “The integration patterns of motion event components in Herero (Bantu, R31)”. The 8th World Congress of African Linguistics. 京都大学. 2015 年 8 月 23 日.

③ Kawachi, Kazuhioro, Yuko Abe, Osamu Hieda, Kyoko Koga, Junko Komori, Nobuko Yoneda, & Hiroshi Yoshino “How African languages fit in Talmy's typology of event integration”. The 13th International Cognitive Linguistics Conference. ノーザンブリア大学，ニューカッスル. 2015 年 7 月 24 日.

④ 米田信子「ヘレロ語（バントゥ R31）における語のプロソディと文レベルの現象」. 日本言語学会第 149 回大会. 愛媛大学. 2014 年 11 月 15 日.

⑤ Yoneda, Nobuko “Conjoint/Disjoint Distinction in Matengo (N13)”. The 2nd International Workshop on Bantu Languages. ロンドン大学 SOAS.ロンドン. 2014 年 3 月 1 日.

⑥ 米田信子「スワヒリ語におけるアクセント・フレーズ」. 日本アフリカ学会第 50 回学術大会. 東京大学駒場キャンパス. 2013 年 5 月 25 日.

⑦ Yoneda, Nobuko “Noun-modifying clauses in Bantu languages.”. The 1st International Workshop on Bantu Languages. 大阪大学中之島センター. 2012 年 11 月 11 日.

⑧ 品川大輔「キリマンジャロ・バントゥ諸語記述研究の射程—マイクロバリエーション研究とその先」. AA 研フォーラム. 東京外国大学・アジア・アフリカ言語文化研究所. 2016 年 6 月 16 日.

⑨ Shinagawa, Daisuke “A tentative analysis on typological microvariation in Kilimanjaro Bantu”. The 8th World Congress on African Linguistics. 京都大学. 2015 年 8 月 21 日.

⑩ 品川大輔 「チャガ語群における前倚辞 *ni=* の言語間対照のための試論」. アフリカ言語学研究会（Aflang）. 京都大学. 2015 年 3 月 29 日.

⑪ Shinagawa, Daisuke “Vowel Coalescence and Morphological Micro-variation in Kilimanjaro Bantu”. International workshop on Bantu languages: Studies in East African Bantu and Microvariation. ロンドン大学 SOAS. 2014 年 3 月 1 日.

⑫ Koga, Kyoko “Event integration in Akan”. The 8th World Congress on African Linguistics. 京都大学. 2015 年 8 月 23 日.

〔図書〕（計 11 件）

① Kaji, Shigeki (ed.) 2017 *Proceedings of the 8th World Congress of African Linguistics*. viii+437p. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

② Kaji, Shigeki 2015 *A Runyoro Vocabulary*. xxxvi+649p. Shoukadoh.

③ 梶 茂樹 & 米田信子 2015『有対動詞の通言語的研究：日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』（梶 茂樹「トーロ語における自他動詞の交替」pp.337-350, 米田信子「スワヒリ語における有対動詞：派生の形式と動詞の意味を中心に」pp.351-368 執筆）（プラシャント・パルデシ、ハイコ・ナロック、桐生和幸（編））. 488p. くろしお出版.

④ 梶 茂樹 2015『世界の文字事典』（「リンガラ語」pp.178-181 執筆）（庄司博史（遍））. 432p. 丸善出版.

⑤ 梶 茂樹 2014『世界民族百科事典』（「無文字言語」pp.186-187,「コミュニケーション」pp.194-195 執筆）（国立民族学博物館編）. 789p. 丸善出版.

⑥ Yoneda, Nobuko 2017 *The Conjoint/Disjoint Alternation in Bantu* (“Conjoint/Disjoint Distinction and Focus in Matengo (N13).” pp. 426-452執筆)(Hyman, Larry & Jenneke van der Wal. eds.). 458p. Mouton de Gruyter.

⑦ 米田信子 2014『日本語複文構文の研究』（「バントゥ諸語における名詞修飾節の形式と意味」pp.617-643 執筆）（益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・円山岳彦（編））. 736p. ひつじ書房.

⑧ 小森淳子・米田信子 2014『アフリカ学事典』（「総説－言語・言語学」pp.110-113 執筆）（日本アフリカ学会（編））. 655p. 昭和堂.

⑨ 品川大輔 2014『チャガ＝ロンボ語（Bantu E623）文法スケッチ』. 142p. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

⑩ 品川大輔，モニカ・アポリナリ 2014『チャガ＝ロンボ語（BantuE623）基礎語彙集』.69p. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

⑪ 品川大輔 2014 『アフリカ学事典』（「都市言語」pp.110-113 執筆）（日本アフリカ学会（編））. 682p. 昭和堂.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

なし

６．研究組織

(1)研究代表者

梶　茂樹（KAJI Shigeki）

京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・名誉教授

研究者番号：10134751

(2)研究分担者

米田　信子（YONEDA Nobuko）

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：90352955

品川　大輔（SHINAGAWA Daisuke）

東京外国大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：80513712

古閑　恭子（KOGA Kyoko）

高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授

研究者番号：90307473

(3) 研究者協力者

なし